

SIPパートナープログラムの提供で 確実、迅速なシステム開発が可能に

「050」番号の付与に始まったIP電話ブームはますます過熱の度を高めている。さまざまなサービス・機器が登場するなかで、事実上の業界標準になりつつあるのがSIP。しかし、新しい技術であるSIPについては国内でも技術者の数は少なく、開発に難航するケースも少なくない。ソフトフロントでは、「SIPパートナープログラム」を展開し、広範な技術、ノウハウ提供を開始した。

SIP(Session Initiation Protocol)がIT・通信市場で注目を集めている。昨年来から大手機器ベンダーが続々と製品を投入し、VoIPにおける事実上の業界標準になると認識されてきている。7月に開催された展示会「Wireless Japan 2003」で行われたソフトフロントのセミナーでも高い関心を集めて、満場の聴講者が熱心に耳を傾けている姿が見られた。

壇上にたったソフトフロント、エンジニアセンターの佐藤和紀チームリーダーは、「SIPは、これまでインターネットが苦手としてきたリアルタイムコミュニケーションを実現するための、基盤となる技術なのです」と説く。「SIPイコールVoIP、VoIPイコールSIPと見られがち」だが、もともとSIPはマルチメディアセッションを実現するためのプロトコルとして規定されているため、単純な音声通話だけに留まらずプレゼンスやイベント通知、インスタントメッセージなどの様々な機能を、インターネット上のアプリケーションと組み合わせて柔軟に展開できるのが大きな特徴。

反面、統合的なSIP環境を構築するためには広範な知識、ノウハウを

必要とするため、いざ開発に入った段階で計画どおりに進められない事例が散見される。実際、SIPはTCP/IPなどを定めているIETFが規定するプロトコルで、基本部分を定めたRFC3261の他、SIPを機能拡張する規格・ドラフトが100種類以上あり、更に研究が進められている。SIP環境を構築するにはクライアントにあたるUser Agentの他、Proxy ServerやRegistrar、Gatewayなどの機器が必要とされ、それぞれのシステム・機器間で相互接続性を確立することが非常に難しい現実がある。また、「インターネット」と「電話」という異なる技術文化を熟知する必要もある。このような理由から、SIP技術とノウハウの蓄積がなければ、ひとつの企業で新たにSIP製品を開発することは非常に困難を伴っている。

ソフトフロントでのSIPの取り組みは1999年から始まっており、2002年10月には関西電力グループ企業、株式会社エイ・オプティコムの大規模なシステム構築も実現している。ソフトフロントはこれまで蓄積してきたノウハウと技術を提供するため、この春から、「SIPパートナープログラム」を

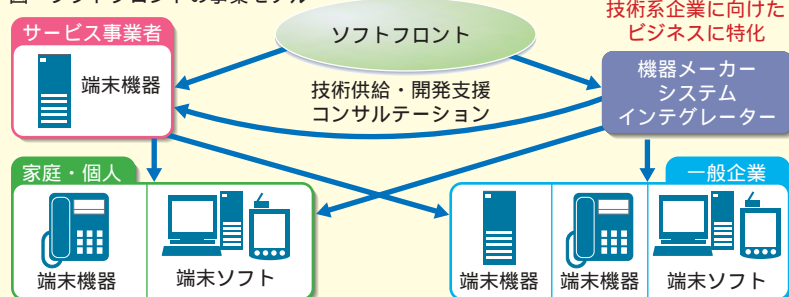


取締役/R&Dグループ、エンジニアセンター、セールスエンジニアセンター担当
阪口克彦氏

開始した。自社開発のSIPミドルウェアを提供することで、多くのキャリア、機器ベンダーなどとの相互接続性を実現するとともに、様々なRFCへの対応や、仕様拡張時の迅速な対応を可能にするものだ。さらには、電話・E-mailでのサポートやSIPエキスパートエンジニアによるオンサイトサポートなどでは、ミドルウェアの使用手法の他、SIPやVoIPの開発支援を幅広く提供している。

ソフトフロントでは、SIP市場の更なる拡大を目指して、オープンな統合プラットフォームとして「SIPパートナープログラム」のパートナー企業を募っていきたい考えだ。

図 ソフトフロントの事業モデル



第3回 ソフトフロント SIPプライベートセミナー

日時 2003年9月17日(水)
13:30-17:00(開場13:00)
開催場所 三田NNビル 地下1階ホール
東京都港区芝4丁目1番23号
セミナー内容 SIPの最新動向、SIPアプリケーションの将来像、SIP開発環境の比較、SIPパートナープログラムの紹介、デモ
受講料 無料
定員 80名(先着順)
URL <http://www.softfront.co.jp/news/event.html>

お問い合わせ先

株式会社ソフトフロント 東京オフィス
URL <http://www.softfront.co.jp/>
E-mail world-info@softfront.co.jp
FAX 03-5366-2031